

ギャンブル依存症と私

Bさん

僕がギャンブルを始めたのは22歳のころでした。飲みに行くと終電がなくなり、会社の先輩の家に泊まりその日は休日だったのでパチスロに行こうと誘われたことでした。それまでギャンブルは幼少期のころ父親とプラスチックのチップを使っての花札と、学生時代のマージャンを年に何回かやる程度でした。

先輩と初めて行ったパチンコ屋で一万円が二万円になり、こんなに面白くてお金の増えるものがあったんだと思い、それからというもの仕事帰りとは休日は朝開店から閉店まで打つ毎日でした。友達とパチンコ屋で偶然に会って、その友達と一緒にパチスロをやっていました。

ちょうどその頃実家を出て初めての一人暮らし、家賃や光熱費など生活に必要なものは何とか払えていたのですが、給料日前にパチスロで負けてお金が無くなると、勤務先のお寿司屋で廃棄処分となったお寿司を食べてしのいでいました。

二年後に引っ越しをして新たな場所で生活を始めたのですが、彼女が出来てパチスロ代とデート代でお金が足りなくなり、ある出来事を思い出しました。友達が消費者金融でお金を引き出したのを思い出したのです。僕にも借りられるかな？と思いきドキドキしていると容易に手続きが終わり消費者金融の無人契約機でお金を初めて借りました。最初は怖いので少額借りて全額返す、ということをやっていたのですが、限度額いっぱいになるまでそう長く時間はかかりませんでした。

三年後に限度額いっぱいになったカード一枚を秘密にして付き合い合っていた彼女と結婚をすることになりました。結婚をしてすぐ妻が妊娠して、結婚して一年後に息子が生まれました。出産に立ち会った時は初めて見る息子を見て目がすごく澄んでいて、感動したのを覚えています。同時に借金が気がかりで、申し訳ないという気持ちにもなりました。

初めて妻におかしいと思われたのはこのころでした。小遣い制になっていたのに、パチスロで負けるとカードの返済が出来なくなって段々と僕は問い詰められていきました。妻がキャッシュカードの管理していたためコソッとキャッシュカードを持ち出しそして引き出し返済、妻に問い詰められると小遣いが足りなくなったからお金をおろしたと嘘をつきました。何度もこんなことをしてはられない。考えついた答えは多重債務、消費者金融のカードをもう一枚作ることでした。

カードを作るとまるで自分のお金のように次々と引き出して、仕事帰りにパチスロをやる日々。そしてまた限度額いっぱいになりました。借金額は五十万円から百万円と増えていき

ました。

最低返済額の期日が迫ると必死にパチスロをしました。そして負けてしまうと夜も眠れず、どうしようかと考えるのです。この頃には僕がお金を取るから妻の財布はいろいろな場所に隠されていました。食器棚、タンスの中、冷蔵庫。僕はそれをことごとく探し出して妻のクレジットカードを抜き取りキャッシングをして何とか最低返済額を入金するとカードを妻の財布に戻すと同時に、ポストを執拗に見てクレジットカードの明細が届くと先回りして捨てていました。

そんなある日ついにサラ金のカードが入っている僕の財布を妻に見られてしまいました。それまで必死にばれないようにお風呂に入っている時も肌身離さず、パジャマのポケットに財布を入れて寝ていた秘密がばれてしまい実家から母親が来て目の前に消費者金融のカードを並べられて、「これはどういうことなの？」と家族会議で問い詰められました。

結局肩代わりをしてもらうことになり、カードが没収され僕はその場で怒られたことで頭に来ていて、もうやりませんと言いましたが、やめる気持ちはさらさらありませんでした。数日後、すぐにもう一枚のカードを作ってギャンブルを再開します。

三社目のカードは限度額が増額され百万円に、それもいっぱいになって四社目のカードをつくり僕は自分の小遣いではどうすることもできない状態に追い込まれて、返済日の朝一番に仕事を抜け出してサラ金業者に「返済が遅れます」と電話をかけることを何度も繰り返しました。僕は誰にも相談できず、仕事を投げ出して失踪しました。

その時たまたまパチスロで二十万円勝っていたのでそのお金を持って隣県へ行きました。電車の中から見える富士の樹海を見ながら、ここで自殺しようと思いましたがそんな度胸もなく結局は失踪先でパチンコ屋に入り浸る生活になりました。漫画喫茶に寝泊まりする生活で、ソファで寝ていて腰が痛くなってきたので途中からビジネスホテルに変えて、朝になったらパチンコ屋に行くという失踪生活でした。

十日ほどでお金がなくなって家に帰ると、妻が驚いた顔でこちらを見ていました。母親が車で迎えに来てくれて、僕は実家に連れていかれました。「あなたはもうギャンブル依存症の施設に行くか、自助グループに行くかどっちかだ！」と言われ、自助グループへ行くことになりました。

自助グループは実家から毎日通い、金曜日は一日二回、一週間に八回のグループカウンセリングへ行きました。しかし半年後に気持ちが落ち込んでしまい、ギャンブルでそれを解消

しようとなりました。止まっていたギャンブルは再発して、やめられない状態に再発した直後すぐに戻りました。

実家から自分の家に戻り、自動車部品の工場に勤めました。ギャンブルは自助グループに通っていた時のみしか止まっていません。仕事の定期代、お昼ご飯代、小遣いを使いギャンブルをしていました。なくなるとまた妻の財布から家庭内窃盗を繰り返しました。自助グループで言われていた「少しやめていた後に必ずひどい状態になる」僕にもそんな状態がやってくることになるのです。

自動車部品の工場であまり働かせてもらえなくなると、僕は夜に居酒屋のアルバイトを始めました。家庭ではこれから借金を返して復帰する夫を演じていましたが、実際は少しでもお金があればギャンブルができる、そういう考えで働いていたと思います。寝不足で仕事に行くので眠いし辛いしで私のギャンブルはひどくなっていきました。そしてとうとう糸がプツリ切れたかのように仕事を突然やめ、ギャンブルと家にいるだけの生活になりました。

親から一時的に借金を返すためのお金を借り、仕事を探すふりや借金を返すふりをしてパチンコ屋に入り浸る生活になりました。返済されていないと手紙が来ていたのを知っていましたがそれを見つからないように捨てていました。妻は僕を見限り、家を出て行ってしまいました。息子が小学校四年生の時でした。ほどなくして裁判所から調停の手紙が届きました。

離婚調停は成立して離婚することとなりました。僕は家族を失ったショックから自暴自棄になり、ギャンブルをやり続ける生活を続けていきました。調停で一カ月に一回息子と合う決まりを作っていたのですが、四カ月の間息子と会うことができませんでした。僕の持っているお金はギャンブルにすべて消えていて会うためのお金すら残せませんでした。

息子と四カ月ぶりに会うため、駅の改札で待っていると遠くの階段から息子が昇ってくるのが見えました。息子は僕に気付く前から涙をぼろぼろと流していました。僕はそんな気持ちでいる息子のことなど考えもせず、ただギャンブルをやり続けている。何もかけてあげられる言葉が見つからず、放心状態の自分がそこにはいました。

何とかしなければと思い、福祉のお世話になって職業訓練校に通わせてもらうことになりましたが、そこでもギャンブルは止まらず、給付金を貰ってはそれをその日のうちに使い果たしてしまい家からおにぎりを作っていく毎日、食べるのだけで精いっぱい履歴書一枚買えない生活、もうこのままでは社会と繋がれないのを本気で感じ始めていました。

僕は初めてこのままでは社会と繋がれない、息子に何もしてあげることが出来ない、自分ではやめられないと突然思い僕は病院を受診しに行きました。

病院に着くと二百問くらいの質問用紙を待合室でやりました。そして別室に通され自分のやってきたギャンブルの問題を正直に臨床心理士さんに話しました。三十分後先生に呼ばれ中に入ると「ようこそ、こんな僻地へ。」と言って和ましてくれました。そこから一時間くらいの説明が行われました。

二百問くらいの質問用紙を見て、先生は単刀直入にあなたは評価されたくてギャンブルをやっている、と言われました。何のことだと思ったのですが、工場に勤めていた時、同僚に僕が担当していたポジションを奪われてしまい、所長が僕を何で評価してくれないのだ、と思い一方的に所長のことを嫌っていたのを思い出したのでそれを話しました。あなたにはギャンブル感がありますよ、そうじゃなければギャンブルにはまることなんてない、いけると思うからやるんですよ。と言われてそうだなと思いました。そして次に僕の趣味について話してくれと言われました。ゲーム、サッカー観戦、アニメ、ネットサーフィンなどいろいろ挙げていくうちに嫌な予感がしました。まさかそれをやってやめろとか言うんじゃないだろうなと思いました。実際そうだったので二、三回「そんなものやってもやめられるわけじゃないじゃないですか。何百回失敗したと思ってるんです？」と反抗しました。しかし話をしているうちに反抗する気がだんだん失せてきました。「ここに来たのは何のために？僕を見て大泣きしていた息子に何かしてあげたいと、社会に復帰したいと思ったから？先生の言うことを聞かないと僕は終わってしまう。」と目先の事ばかり考えている僕がいました。診察室にあったカレンダーを指さしながら、次にお金が入るのはこの日なんですけど、僕はどうしたらいいですか？と先生に聞きました。先生はよし、食料品を一カ月分全部買いこめ、と言いました。僕はそんなことはもうやっている、と思いました。鬱に効く薬だそうか？とも言いました。そのかわり一日何もできずにボーっとしていることになるけど？とも言いました。怖いのでそれは拒否しました。最後に先生はゲームが好きなんだよね。お金が入ったらオンラインで出来るゲームではなく、オフラインのゲームを一本買いなさい、そしてそれをずっとやっつけていなさい。と言いました。僕は観念して、「分かりました、やってみます」と言いました。

お金が入る当日、いつもは払うものを全部払ってパチンコ屋に入っていくことを繰り返していたのですが、払うものを払ってパチンコ屋へ向かわずにブックオフのゲームコーナーへ行きました。

僕は金銭欲の裏に隠された別の欲望、評価欲（名誉欲）をギャンブル以外で埋めるために

飽くなき趣味への挑戦を始めました。自分の手のあくことがないように、ギャンブルにお金を使うくらいなら有料の動画サイトに入ろうと思い、スポーツ、アニメ、ドラマの3サイト月額三千円を使ってそれをずっと見ていることにしました。オフラインのゲームも安売りのサイトで手に入れてずっとやることにしました。サッカー観戦にも出かけました。

お金を持った時に出るパチスロがどうしてもやりたい衝動とも戦いました。特に家賃を払いに行く時がものすごく衝動が出て、そんな時は息子の顔を思い浮かべて、「健康で幸せな生活をする」と念仏のように唱えてパチンコ屋の前を通過する日々を繰り返しました。

一カ月目、スリルがなくてつまらないんです、と先生に言ったら、「だったらスリルのあるものをやればいいじゃないですか。例えばパラグライダーとか。ギャンブルに似たものをやるんですよ。」と言われました。

二カ月目、この頃はすごくうれしかったのを覚えています。僕はギャンブルをやっていない！病院のグループカウンセリングでも嬉しそうに話したのを覚えています。

そして三カ月目、病院のグループカウンセリングで先生からギャンブルに代わる新しい活動は何をやっていますか？と聞かれました。僕はパズルゲームをやりこんでいて、一時間くらいゲームオーバーにならずに続くようになっていたので、自分の得意なこと、自分なりに評価できるものとなっていました。「パズルゲームがゲームオーバーになる際のスリルと、何も考えずに黙々とパズルをする感覚がギャンブルにすごく似ています。」と答えました。先生は「そう。あなたはそんなもので良かったのに何でギャンブルなんてやっていたんですかね。どうしてですかね？」何も言えませんでした。

僕は二年前のあの日からギャンブルをやらずに生活させてもらっています。ギャンブルに代わる新しい生き方を頂いています。これからもギャンブルに代わる新しい、人に迷惑をかけない欲望の満たし方をひたすら探し続けていきたいと思っています。